



巻 頭 言

飛躍にそなえて

専務取締役 外 村 吉 夫

私の好きな言葉の一つは「飛翔」である。先日試みにワープロで「とぶ」を探したら「飛ぶ」「跳ぶ」の2つが出た。最近では翔んでる女性などという字句も見られるが、ワープロの方は、「ショウ」の項に入っているが、未だ翔ぶには到っていないようである。

最近と言えば、「ニューメディア」なる言葉にもしきりにお目にかかる。昨年春に発行された新語の字引には載っていないので、とくに頻繁に使われ出したのは昨年秋あたりからであろうか。あまりよく実体がわからないので、ここは一つ耳学問でと、若い人達に色々聞いてみたが、文字通り「情報伝達の新しい媒体」であるが、まだはっきりした定義が固ったものではないらしいこと、放送系、通信系、その中間に大別され、代表的なものとして衛星放送、高度情報通信システム、双方向CATVなどがあること等がやや分かった。ただしこれらのものが、最新のコンピュータ技術、デジタル技術、半導体技術、光技術、画像技術、無線技術、音声認識技術、各種センサ技術など一連の技術革新の産物であることは、はっきり認識し得たし、またニューメディアにどのような情報を流すか、どのような情報が望まれているか、情報の内容如何が今後の発展のカギでもあるようだ。そしてジャーナリズムに広くとりあげられ、さわがれ出したのこそ最近のことながら、夫々の分野で種が播かれ、研究が始められたのは、もうずい分以前からであると知るにつけても、科学技術の進展が急速に、ある日突然花開くように見えても、決して一朝一夕になるものでないことを更めて感じる次第である。

それにつけても、春になると、シゴトの合間に時々思い出すことは、僅か2年足らずの短い間ではあったが、学徒動員当時の一こまである。ずい分昔のことで恐縮だが、昭和19年春、丁度今頃、グライダーを終り中等練習機（通称赤トンボ）訓練の始まる頃のことである。

1. 離 着 陸

エンジンをふかせ操縦桿を手前に引けばとび上がる……位に思ったらと

んでもない見当ちがいである。第一の問題は、操縦席に座った時さっぱり前が見えないことである。機体が十数度上向きの姿勢で接地しているので座席に座ると前は青空が見えるだけで、直進の為の前方目標が全く見えない。第二は滑走を始めると機首を左右に振ることである。前が見えず、機首の振れるのを機敏に修正しながら加速直進しなければならないわけである。一見何でもないような離陸でも、端から見るほど生やさしいものではない。如何に機敏に、且つ柔軟に対応するか、生命と引き換えの作業である。企業でいえば、前途不確実性の激動の時代に、常に八方に目をくばり、如何に機敏に対応するかということになるだろうか。

2. 編 隊 飛 行

課程が進むと首題の訓練となる。ここでの初体験は、教官の乗った（編隊）長機が、いかにも意地わるをしている様に思えることである。急にスピードをあげたり、さげたり、右に行ったり左に行ったり、高度を上げたり下げたり、ジグザグ飛行をしている様に思えることである。実は長機は定速で直線飛行して居り、未熟な自機の方がジグザク飛行をしているのだが、にも拘らず、相手のせいに思えるから不思議というか、身勝手というか…更に進んで、編隊での各種運動ともなれば長機の運動開始の初動をす早く発見して、それに追従してエンジンの出力を上げたり下げたりとなる。かつて、米海軍のブルーエンゼルス編隊アクロバットを目のあたりに見たが、昔の体験があるだけに、彼等の見事な飛行ぶりに、訓練一否鍛練の極致を見る思いであった。企業でいえば、職場のチームワーク、コミュニケーション、OJTという課題であろうか。

3. 定 時 定 点 必 着

決められた時刻に、決められた場所に必ず到達することである。航空部隊は、地上部隊、海上艦船、或いは他の航空部隊と協同してオペレートすることが多い。従って定時定点必着でなければ効果は期し難い。その昔サイパン島から400～500機の大軍で来たB29にしても同島のいくつかの飛行場から夫々出発したものが、定時定点に集合して大編隊を組んだものだし、またそれを援護する戦闘機隊は航続距離の関係上、それより近い硫黄島から出発して途中合流したものであり、こうした連けいが整合しなければ、効果が挙がらないのみか、却って莫大な損害をもたらすに至るのである。企業でいえば、各部門間の連けいを密にして、適時適切な効率的運営を図るということであろうか。

飛躍から飛翔へ、そして飛行機のことにと、思わず筆が翔んでしまったが、昭和60年代を目前にひかえ、春播きのシーズンに入った59年春4月、59年度会社方針が示され中期目標に向かって始動開始の春4月、離陸一編隊一定時定点必着と想いを未来に馳せたい。